

福祉文化通信

～well-beingへの道～

2010.3.31
vol.63

編集委員
安倍 大輔 遠藤 美貴 稲田 泰紀
河西 正博 山中 冨子

日本福祉文化学会事務局 〒165-0026 東京都中野区新井 2-12-10 芸術教育研究所内 Tel/Fax: 03-5942-8510 E-mail: fukushibunkabito@nifty.com

・1月24日「近所福祉inぬまづ」(参加者350名)
・中部東海ブロック広報紙「OUR LIFE」(56号・57号・58号)発行
・調査研究活動「長寿社会に関する県民意識と実態調査」(1341件回収)

●関西ブロック

・6月20日、21日 関西ブロック 現場セミナー開催『郡部高齢者の暮らしと文化』

●中国・四国ブロック

・12月6日(日)中国・四国ブロック大会開催(参加者238名)
「住民の手で作る上げる福祉文化」

●九州ブロック

・2月18日(木)2010年度全国大会打ち合わせ

各種委員会活動

●研究委員会

・7月25日(土)一番ヶ瀬康子先生の「福祉文化」論
・9月29日(火)「地域福祉の」とでの「福祉文化」論

●企画委員会

・2010年2月開催の東京大会実行委員会8回開催
(5月15日、6月26日、7月16

日、9月8日、10月14日、11月18日、12月14日、1月18日)
東京大会では第3分科会、2日目の第4セッションを委員会として運営する。

●広報委員会

・学会ホームページ
(http://www.fukushibunkanet/)の充実
(2009年1～12月2010年2/12現在 7000人閲覧)

必要な情報を随時アップ
・委員会・ブロック活動報告のHP掲載について
・委員会報告
年3回(7月・11月・3月)各理事に活動状況を問い合わせ、内容をHPにアップする

各ブロックの活動を把握し、チラシや報告原稿の催促をおこなう
・メルマガの発行 1月現在64名が登録 随時、必要な情報を発信している

●福祉文化研究誌編集委員会

・「福祉文化研究」vol.19の投稿原稿の収集と査読を行う。
特集テーマ「地域社会の再生と福祉文化」

投稿数 論文 10編 研究 ノート 5編 その他 2編

掲載数 論文 4編 研究ノート 5編 その他 3編

・「福祉文化研究」vol.20の企画。
・委員会開催(5月9日、9月13日、11月14日、12月19日)

●将来構想委員会

4月11日 協議題
①会員拡大について
②ブロック活動について
③実践と研究の融合について
④出版と著作権について
⑤その他
6月14日 協議題

①「新・福祉文化シリーズ」の刊行について
②国際会議について
③会費未納者への対応について
④学会活性化イベントの開催について

●国際交流委員会

9月11日、12日 東アジア社会保障国際フォーラムへの参加(中国・北京 人民大学)
●事務局
事務局会議・作業等の実施
4月26日、5月16日、5月30日、7月18日、8月8日、8月30日、9月5日、11月7日、

1月16日

理事会企画特別イベント

・11月10日(火)「アクティビティ・レクリエーション」セミナー
「高齢者と園芸療法」(登坂ユカ)「これからの福祉文化」(登坂ユカ・蘭田碩哉・河東田博)(東京・立教大学)(レクリエーション部会との共催)(参加者30名)
・12月12日(土)いきいきエージング研究会シンポジウム「あなたの老後、どこで暮らしますか?」(シンポジスト:松尾英人・山崎春人・上野健一・向平すすむ、コーディネーター:石田易司、コメンテーター:蔭山力雄・岡村ヒロ子)(大阪・大阪市立いきいきエージングセンター)(後援)(参加者120名)

福祉文化通信

第63号 2010年3月末発

研究誌

「福祉文化研究」vol.19刊行予定(2010年3月)

出版・刊行

続・福祉文化シリーズ 第二巻「福祉文化とは何か」(日本福祉文化学会編集委員会 編集代表:河東田博、2010年2月)
第二巻「アクティビティ実践とQOLの向上」(日本福祉文化学会編集委員会 編集代表:石田易司、2010年2月)

会議

理事会
第1回理事会
期日:2009年10月3日(日)
場所:立教大学(東京都豊島区)

お詫び

広報担当理事の怠慢と事務局移転にともない、様々な連絡調整がスムーズにいかず、63号の発行が大幅に遅れてしまい、たいへん申し訳ございませんでした。
会員の皆様、そして早々に原稿をご提出いただいた河東田会長、吉田会員、和泉会員に心からお詫び申し上げます。

広報担当理事/遠藤美貴

みなさんの中には今尚「福祉文化」概念がよく分らず、何を握り所に学会活動を行ったらよいのかが分からないと考えている人がいるのではないだろうか。これは、日本福祉文化学会が、「福祉文化の魅力」を伝えるための「術」(研究・実践の融合とその方法)を持ち合わせていなかったからなのではないかと思われ

る。私たちはこのような認識に立ち、今、「続・福祉文化シリーズ」(全5

冊)を考えている新しい「福祉文化」概念とは、「すべての人が隔てなく、差別されることなく多様性を認めあい、独自の価値観や生活様式に互いに誇りをもち、尊敬と自由のなかで生きる権利を有し、意思決定への参加と、社会発展の成果を享受することができるようにすること。そのために、福祉の積極的な実践としての文化を育み、さらに深

まていく。

「社会には、当事者の地域生活、社会参加、自己実現、ファースト・チャレンジを困難にしている現実がある。それは、健康な人に合わせたモノづくりや社会づくりであり、制度を臨機応変に利用できない社会であり、福祉の専門化・細分化が進む社会である。さらには、権利保障思想が欠落している社会や夢をもつことをあきらめさせて

る。多面的・客観的なもの見方もできるように。『社会変革と新しい価値の創造』のためには、新たな「福祉文化的価値の創造」が求められており、「福祉文化的価値の確立」を図り、「福祉文化的価値の普遍化」を実現させていく必要がある。

その上で、『福祉文化社会創造』のための社会づくりを考えていく必要がある。そのような社会は、夢をもつことをあきらめなくてもよい社会であり、安心して暮らせる社会であり、あたり前のことがあたり前にできる社会、人間としての尊厳をもった社会である。それは、安心して楽しく暮らせるユニバーサルな社会であり、あたり前のことがあたり前にできる社会であり、人間としての尊厳をもった社会でもある。それが、すなわち「共生社会」であり、『創造的福祉文化社会』でもある。

日本福祉文化学会のみなさんへ

理事からのメッセージ① 河東田博



巻、明石書店)の刊行を通して「福祉文化の魅力」を伝える努力をしようとしている。

第1巻の「福祉文化とは何か」

(2010年2月刊行予定)の編集が私が担当することになったが、この本の刊行を通して新たな「福祉文化」概念を提起したいと考えている。この新しい「福祉文化」概念は私見の域を出ないが、議論を呼び起こす呼び水にはなるのではないかと思っ

味わいのある文化を創り出していく」という「多元主義的」な考え方を基にした「創造的福祉文化」概念である。

「創造的福祉文化」概念は、2006年に行われた第17回日本福祉文化学会さいたま大会(於:浦和大学)シンポジウム「福祉文化創造の当事者を目指す」福祉の転換期を迎えて」で、私が行った次のような「まとめ」の中から生まれて

しまう(あきらめてしまう)社会や福祉文化が未成熟な社会がある。しかし、「社会変革と新しい価値の創造」のためには、既存の人間観・価値観を問い直し、夢をもつことをあきらめないこと、絶えず双方の対話・歩み寄りが必要であり、情報保障も必要となる。そうすれば、

人の心が理解でき、自分のこととして考えることができるようになる

「現場の力」を発見できる「面白さ」「経験」を共有できる「喜び」「創造性」を掻き立てる「高揚感」を伝えていくことができるのではないかと考えている。

ブロックからの 会員紹介

北海道ブロック 吉田 明代さん

自己紹介

私は北海道女子大学生生活福祉学科の1期卒業生です。その後大学院に進み、修了後は、母校の介護福祉学科の事務員として3年間働いた後、旭川の専門学校で社会福祉学科の教員として心理学や実習担当をさせていただきました。教育現場での学生への教育の一方で、私は学生達から多くの事を学びました。

特に、初めて人との関わりの中で「生きる喜び」を与えられた気がします。さまざまな困難を一緒に乗り越えることにより、日々喜びを見出すことができました。現在は、公共職業安定所にて相談員をしております。さまざまな方との一時の出会いの中で支援の難しさや喜びを噛み締めながら日々精進しております。

から学ぶことも減退してしまうと考えています。

転機

私の福祉に対する意識を変えてくれたのは大学での一番ヶ瀬先生の特別講義です。

学生ときは、「人のために福祉に携わりたい」と安易な考えでしたが、先生のお話を聞いた後から「人のためだけではなく、自分のために福祉を学びたい」と考えるようになりました。

研究について

学生の頃から、「食文化」に関する研究等に興味があり、修士論文でも「食」と「福祉」に関する研究をしていました。「衣・食・住」は、時代が変わっても、私達の生活に欠かすことができない原点ともなるべきものだと思います。文化としても非常に興味深い歴史を持つている部分だと思っております。まだまだ、勉強不足ですが、今後研究を深めていけたらおもしろい分野ではないだろうかと考えています。

また、教育現場にいた頃は、人と人との希薄さが生み出した事件が日々起こり、毎日のようにニュースで流れていました。「人の痛みがわからない」、「言葉の刃を平然と振りかざす」：自分の教え子にはそんな人間に

た。自己満足の福祉の世界に生きるのではなく、特別なものでもない福祉の領域。

誰もが関わっていくものであるという当たり前のような考え方を、学生の私たちにわかりやすく伝えてくれたことによって新たな考え方で福祉と向き合うことができました。その他にも、坂本道子先生、阿部祥子先生、佐藤嗣道先生など、本当に素晴らしい先生方の講義を受けることができたことは、今でも私の誇りです。

なつてほしくないという気持ちがあり、ソーシャルワークの技法を自分達の生活の中に取り入れて人と関わる事ができないだろうか?と思ひ、学生達に調査を行い、2年間の経過を観察し論文にしました。

学生はあまり意識して生活をしていなかったように見えていたましたが、卒業後、自立している彼らから人との関わり方の難しさや大切さを感じているという報告や悩みを聞いてみると、やはり少しでも心の中で意識し、社会人として頑張っている様子が伺えます。すぐに答えの出るものではなく、少しずつ色々な経験から感じたりできるようなることがとても大切なことであり、成長することにもつながっているのではないかと最近感じています。

福祉文化とはこのように答えが目に見えないものばかりではなく、色々な背景や角度から物事を捉え、日々自分の中で色々なことを感じていくことが原点になっているような気がします。自分で気づきを感じながら生活していかなければ、それを人に伝えることも難しく、人

もちろん、1期生の全員が今でもそう思っており、それぞれの道を歩んでいると思います。



日本福祉文化学会 第11回中国・四国ブロック

大会報告

大会事務局長 和泉とみ代

2009年12月6日
(日)「住民の手で作られる福祉の文化」の大会テーマのもと、宇多津町保健センター(香川県綾歌郡宇多津町)において、のべ238名(一般66名、学生172名)参加のもと開催された。



地元、宇多津町の谷川実町長の祝辞では、小さな町単位で福祉を根付かせる重要性について語られた。基調講演として日本福祉文化学会会長、河東田博氏から「福祉文化とは、福祉文化の魅力とは何か」がなされた。

午後の第1分科会では東京おもちゃ美術館館長、多田千尋氏から「子どもの発

達と福祉文化」をテーマに講演がなされた。第2分科会では「住民の手で作られる福祉の文化」をテーマにシンポジウムが開かれ、福祉文化を作り上げるには何をすべきか熱く論議された。

参加者からもとても良い大会だったと賞賛の言葉をいただくことができた。

2009年度日本福祉文化学会事業報告

大会

●第20回 日本福祉文化学会全国大会 東京大会

福祉文化が創る共生と協働の20年の歩みとこれからの変革
期日：2010年2月27日(土)～2月28日(日)
場所：早稲田大学国際会議場

各地方ブロック活動

●北海道ブロック
9月19日(土)公開シンポジウム

「地域を創るー医療と福祉は何ができるかー」
(参加者103名)

●東北ブロック

9月26日(土)第10回宮城県富谷町地域福祉フォーラムの後援

9月23日(水)東北ブロック研修会・ブロック会議
講演テーマ：「地域福祉推進における住民の地域福祉の担い手意識の検証」

11月14日(土)第4回みやぎ在宅支援ドクターネット講演会の後援

●北陸ブロック

2010年2月6日、7日福祉文化セミナー
(参加者90名)

福祉文化セミナーin燕三条
地域における福祉文化実践を考える開催
●関東ブロック
企画委員会と協力し東京大会

に向けた実行委員会を8回開催
(5月15日、6月26日、7月16日、9月8日、10月14日、11月18日、12月14日、1月18日)
東京大会では第4分科会を担当

●中部東海ブロック

5月17日公開型研修会「協働と福祉文化」(参加者30名)
8月8日公開型研修会「現場小セミナー/もうひとつの私の家・居場所づくり」

9月6日公開型研修会「調査分析の取り組み」協働による福祉社会再構築と福祉文化
(参加者50名)

10月18日第8回福祉文化研究セミナー
(参加者60名)
「パノラマ方式討論」長寿者とともに小地域をつなぐ仕組みづくり実現にむけて

12月20日「近所福祉イン」がわ
(参加者250名)